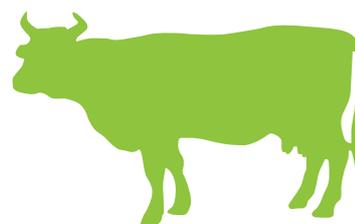


牛肉



◆ 飼養動向

肉用種の飼養頭数、3年連続で増加

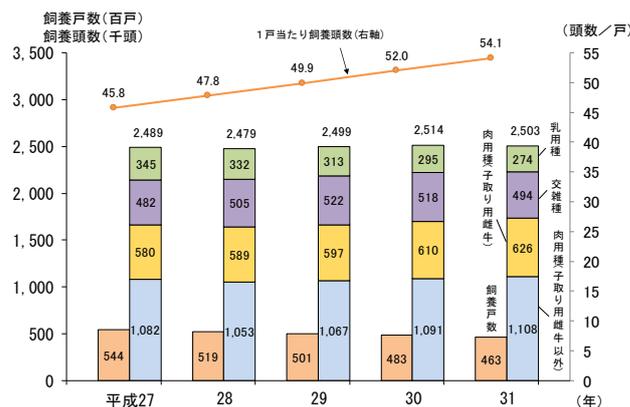
肉用牛の飼養戸数は、生産者の高齢化などによる離農の進行により、小規模層を中心に減少傾向が続いており、平成31年は、4万6300戸（前年比4.1%減）となった。

総飼養頭数は、29年、30年と2年連続で増加したものの、31年は250万3000頭（同0.4%減）と前年度をわずかに下回った。品種別に見ると、肉用種は、22年に発生した口蹄疫の影響などにより減少していたが、子取り用雌牛（繁殖雌牛）頭数が28年度以降増加に転じたことなどから、31年は173万4000頭（同1.9%増）と3年連続の増加となった。乳用種は、乳用牛の減少に加え、乳用牛への受精卵移植技術の活用などによる和子牛の生産拡大や、性判別精液の活用などによる乳用後継牛を確保する動きにより、乳牛去勢の減少が続いていることから、31年は27万4400頭（同7.0%減）となった。交雑種は、肉用子牛価格高騰を受けた酪農家での乳用牛への黒毛和種交配率の

上昇により、28年、29年と2年連続で増加したものの、30年以降、乳用牛の減少に加え、乳用牛への受精卵移植技術の活用などによる和子牛の生産拡大や、乳用後継牛を確保する動きがあることから、31年は49万4200頭（同4.6%減）と2年連続の減少となった。

この結果、1戸当たりの飼養頭数は、54.1頭（同4.0%増）と前年度からやや増加した（図1）。

図1 肉用牛の飼養戸数および飼養頭数



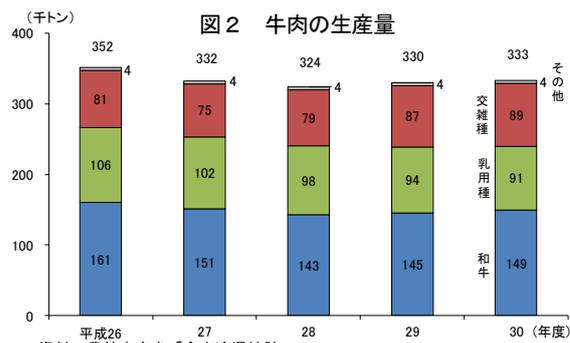
資料：農林水産省「畜産統計」
注：各年2月1日現在。なお、31年は概数値。

◆ 生産

30年度の生産量、前年度比1.0%増

高齢化に伴う離農の進行や、平成22年に発生した口蹄疫、23年8月の大規模生産者の経営破たんなどにより繁殖基盤が縮小し、平成22～28年度の牛肉生産量はおおむね減少傾向で推移していた。29年度は、乳用種が前年度を下回ったものの、繁殖基盤が拡大に転じた和牛や交雑種が前年度を上回ったことから、全体では5年ぶりに増加した。30年度は、全品種で同様の傾向が続き、乳用種は9万911トン（前年度比3.2%減）と前年度をやや下回った一方、和牛、交雑種はそれぞれ14万9183トン（同2.8%増）、8万8725トン

（同2.2%増）と前年度をわずかに上回り、全体では33万2851トン（同1.0%増）となった（図2）。



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

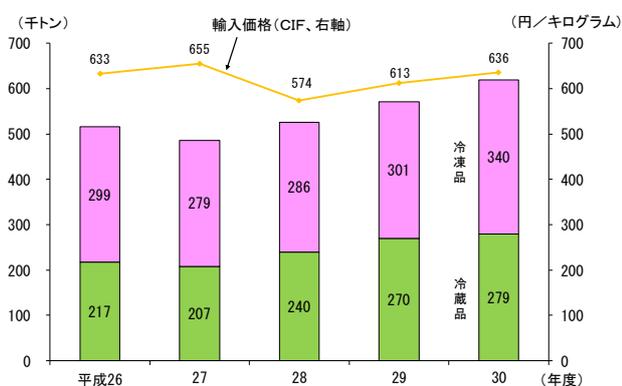
◆ 輸入

30年度の輸入量、3年連続で増加

近年の牛肉輸入量は、外食需要などの好調な需要を背景に、おおむね増加傾向で推移している。

平成30年度は、近年の国内の好景気などを背景に、焼肉やハンバーガーなどの外食産業などを中心に牛肉の需要が拡大していることから、61万9686トン（前年度比8.4%増）と3年連続の増加となった（図3）。

図3 牛肉の冷蔵品・冷凍品別輸入量および輸入価格

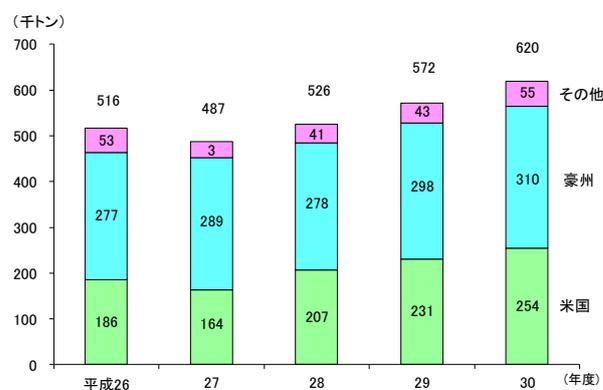


資料：財務省「貿易統計」
注1：冷凍品にはくず肉などを含む。
注2：部分肉ベース。

30年度の国別輸入量を見ると、豪州産は、現地の干ばつの影響などにより（飼養頭数減少のための雌牛と畜頭数の増加による）生産量の増加などから、31万64トン（同4.1%増）とやや増加した。

米国産は、好調な需要を背景に、25万4324トン（同10.3%増）と前年度からかなりの程度増加した（図4）。

図4 牛肉の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

◆ 消費

30年度の推定出回り量は前年度比2.9%増、家計消費は同2.1%増

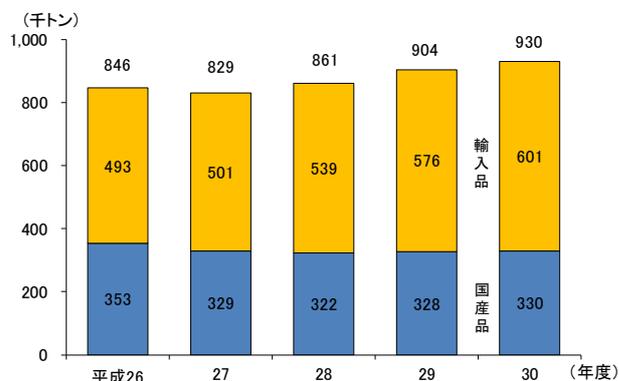
推定出回り量

牛肉の推定出回り量は、近年、焼肉などの肉ブームを背景に、好調に推移している。

平成30年度は、引き続き好調な需要を背景に、国産品は32万9815トン（前年度比0.6%増）とわずかに、輸入品は60万550トン（同4.3%増）とやや、いずれも前年度を上回った。この結果、全体では93万365トン（同2.9%増）と3年連続で増加した（図5）。

なお、合計に占める国産品の割合は35.5%（同0.8ポイント減）と4年連続で前年度を下回った。

図5 牛肉の推定出回り量



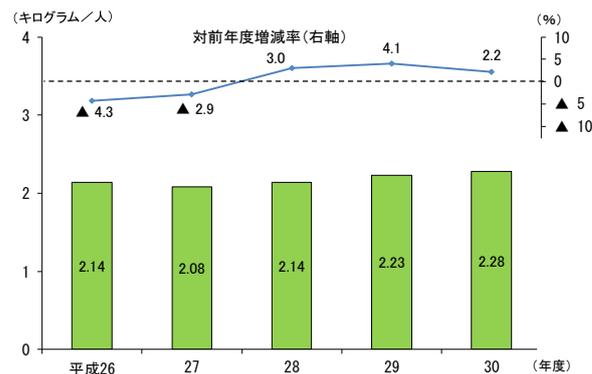
資料：農林水産省「食肉流通統計」、財務省「貿易統計」、推定期末在庫より農畜産業振興機構で推計
注：部分肉ベース。

家計消費

牛肉消費の約3割を占める家計消費は、平成22年度以降、景気低迷による低価格志向の高まり等による牛肉需要の減退などを背景に、減少傾向で推移してきた。

28年度以降の家計消費量は、好調な牛肉需要を背景に回復傾向となっており、30年度は年間1人当たり2.3キログラム（前年度比2.1%増）と3年連続で増加した（図6）。

図6 牛肉の家計消費量（年間1人当たり）



資料：総務省「家計調査報告」

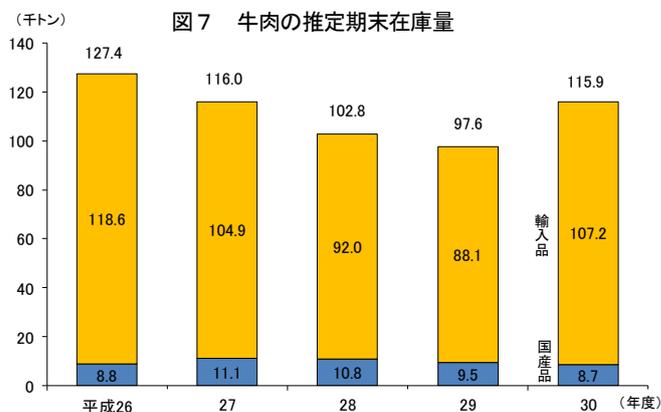
◆在庫

30年度の推定期末在庫量、前年度比18.8増

牛肉の推定期末在庫量は、平成29年度までは、輸入量が増加したものの、輸入品の出回り量が好調であったことなどから、4年連続で減少となった。

30年度は、前年度末の在庫が少なかったことなどから、全体では、11万5940トン（前年度比18.8%増）と前年度を大幅に上回った。このうち、輸入品は10万7206トン（同21.7%増）、国産品は8734トン（同8.0%減）となった（図7）。

図7 牛肉の推定期末在庫量



資料：農畜産業振興機構調べ

注1：部分肉ベース

注2：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

◆枝肉卸売価格

30年度の牛枝肉相場、前年度を上回って推移

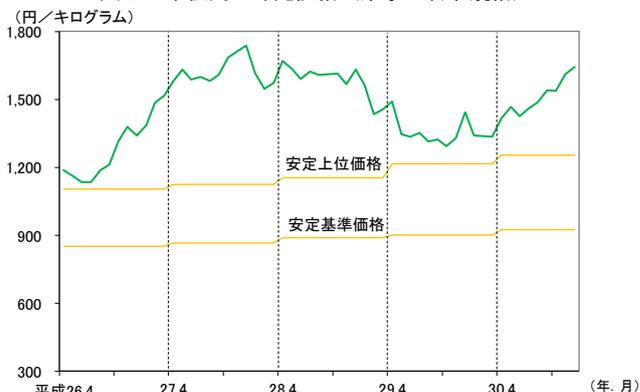
省令規格

牛枝肉卸売価格（東京・省令規格）は、生産量の減少や底堅い需要などを背景に、近年、堅調に推移している。

平成30年度（4～12月）は、生産量の減少を受けた過去最高水準となる27～28年度の相場を下回ったものの、引き続き高値で推移しており、1キログラム当たり1511円（前年度比11.2%高）と前年同期をかなり大きく上回った（図8）。

なお、指定食肉等の価格安定制度は、TPP11の発効に伴い、30年12月29日をもって終了した。

図8 牛枝肉の卸売価格（東京・省令規格）



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注1：省令規格の卸売価格は、去勢牛B2とB3の加重平均。

注2：消費税を含む。

注3：指定食肉等の価格安定制度は、TPP11の発効に伴い、平成30年12月29日をもって終了した。

和牛

和牛（東京・去勢A5、A3）の枝肉卸売価格は、近年、和牛の出荷頭数の減少に加え、インバウンド需要や輸出需要を含む好調な牛肉需要などにより、記録的な高値で推移していた。

平成30年度は、和牛の出荷頭数が2年連続で増加したものの、高値を維持しており、A5が1キログラム当たり2818円（前年度比0.7%高）、A3が同2261円（同5.4%高）といずれも前年度を上回った（図9）。

乳用種

乳用種（東京・去勢B2）の枝肉卸売価格は、近年、乳用種の出荷頭数の減少や底堅い需要などを背景に、高値で推移している。

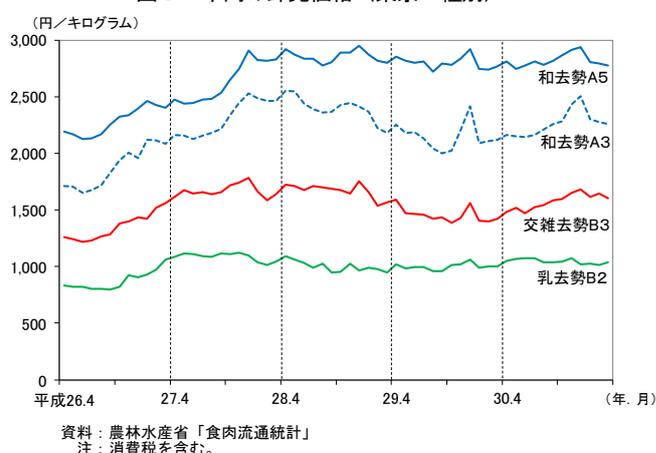
平成30年度は、出荷頭数の減少が続いていることから、1キログラム当たり1046円（前年度比4.6%高）と前年度をやや上回った。

交雑種

交雑種（東京・去勢B3）の枝肉卸売価格は、近年、和牛の相場高を背景に、比較的手頃な価格帯で適度な脂肪交雑の入った交雑種への一部需要シフトなどにより、高値で推移している。

平成30年度は、引き続き同様の傾向が続いていることなどから、1キログラム当たり1576円（前年度比8.4%高）と前年度をかなりの程度上回った。

図9 牛肉の卸売価格（東京・種別）



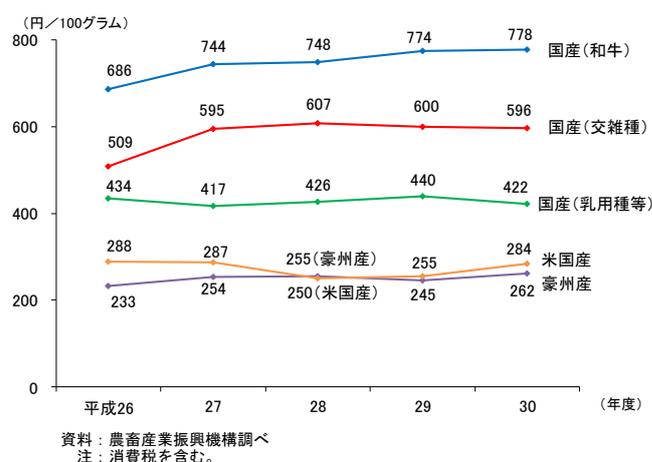
◆小売価格

30年度の小売価格、和牛のばらは1キログラム当たり778円

牛肉の小売価格は、品種や部位によって動きは異なるものの、おおむね横ばいで推移している。なお、国産品については、近年の枝肉の相場高を背景に、比較的高値が続いている。

平成30年度の小売価格（ばら）を見ると、和牛は1キログラム当たり778円（前年度比0.5%高）、国産牛（交雑種）は同596円（同0.7%安）、国産牛（乳用種等）は同422円（同4.1%安）、米国産は同284円（同11.4%高）、豪州産は同262円（同6.9%高）となった（図10）。

図10 牛肉の小売価格（ばら）



◆肉用子牛

30年度の肉用子牛価格、黒毛和種は前年度並み

黒毛和種

家畜市場における黒毛和種の子牛取引頭数は、生産基盤強化対策等により、減少傾向であった繁殖雌牛が28年度に増加に転じたことから、取引頭数は回復傾向で推移しており、30年度は31万708頭（前年度比0.2%減）と前年度並みとなった。

また、子牛取引価格は、繁殖基盤の縮小に伴う出生頭数の減少、枝肉の相場高などにより、平成22年度以降上昇が続き、近年は28年度をピークに低下しているものの、引き続き高値で推移している。

30年度は、1頭当たり76万6000円（同0.3%安）と前年度並みとなった（図11）。

ホルスタイン種

ホルスタイン種の子牛取引価格は、近年の枝肉の相場高などを背景に、平成23年度以降、28年度を除き、前年度を上回っており、高値が続いている。

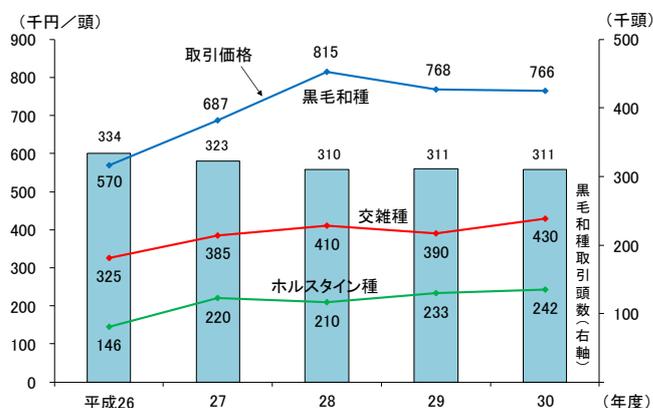
30年度も同様の傾向が続き、同24万2000円（前年度比3.5%高）と前年度をやや上回った。

交雑種

交雑種の子牛取引価格は、近年の枝肉の相場高などを背景に、平成25年度以降、29年度を除き、前年度を上回っており、他品種同様、高値が続いている。

30年度も同様の傾向が続き、同43万円（前年度比10.1%高）と前年度をかなりの程度上回った。

図11 肉用子牛の市場取引価格と黒毛和種取引頭数



資料：農畜産業振興機構調べ
注：消費税を含む。